
バカとテストと英霊達

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと英霊達

【Nコード】

N4422BA

【作者名】

御根通久

【あらすじ】

明久は幼少の頃より自分を守護する英霊の存在を知っていた。だけど、その事は誰も信じてなどいなかった……それでも明久は馬鹿にされる事を知っていても英霊達を嫌わず、まっすぐ生き続け、征服王と英雄王の教育（……？）を受け、のびのびと成長し続けて文月学園に入学し、試験召喚戦争でFクラス代表となって全てのクラスを征服するという野望を持っていた……だがしかし、運命は明久にFクラスに入るなと拒絶したのである。これは、英霊達と明久による試験召喚戦争での物語である。

※明久×姫路・明久×島田は確実に無い上に姫路と島田は酷い目に合う可能性が高いです。Fateシリーズとクロスしてますが世界観はバカテスのまま。

後は、表立って動く転生者とモブ転生者が複数いますので注意してください。

プロローグ（前書き）

………なかなか筆が進まないのもまた気分転換に書いて溜
まったものを

投下いたします。

こういうことをやってるから物語が進まないんですよー………

バカとテストと英霊達、よければ楽しんでいてください

プロローグ

「なんと仰られましたか？」

「何、今度君の担当する世界に20人の人間を転生させるから調整よろしく、と言っただけだが」

いくつものコンピューターが並んでいる室内で、一人の男性が別の男性に呼ばれ、話を聞いていたのだが、出てきた内容に目が点となったのである。椅子に座っている方の男性はその反応を予測できてはいたので、特に咎めは

しなかったのである。

男の後ろに並んでいる数人の男は、その数のおおきに目が点となっており、

下手したら自分達もそうなる可能性が高いのではないかという不安で顔が青くなっていた。

「いやいや、4・5人ぐらいなら結構話は聞きますけど………何がどうして

そんな人数を送り込む事態になるんですか!!?」

「仕方がないだろう、時期が重なってちょうど空きがあるのが君の担当

世界軸しか空いてなかったのだから……君のところに資料は転送しておくから

さっさと作業に取り掛かってくれたまえ………まだまだ仕事

あるんだ」

椅子に座っている男の言葉に、そういえばこの人休み取ってないんだったと

思い出しつつ、仕方なく渋々と引き下がった。

自分のところではほぼ休みをとり放題だったので、その分のツケが来たのだと

納得させながら。

《君のところは5000人だ》

え?》

瞬間、室内の時間が停止した。

他に作業をやっていて話を聞いてなかったはずのものも、20人で頭を

痛めていた者も、後ろに並んでいたものも同様に止まった。

《ちよちよちよーっと待ってくださいよ!!? 確かに多いことは
とは

理解してまずけど、100人を超えることはなかったじゃない
ですか!!?》

いくら人気の世界観とはいえ100人は異常ではあるのだが、5000という

数字の前には霞んで見えてしまう。

男はその男の運の悪さに涙しつつ、自分の担当を完了させるために席に戻った。

《ほかの課だと万単位が出たからまだマシだ……》

《その人大丈夫！！！？》

残業とかそういうレベルを遥かに超えてる地獄のような言葉に部屋に居た人物は
全員涙して、後で差し入れを用意してやろうと誓っていた。

*

「なんだ、こりゃ」

いざ、20人に欲しがっている能力付与して送り込もうという段階で……

不可思議な要求が多々あった。

一応可能ではあることなのだが、わざわざ自分では無く他人に対して能力を

付与しているという異質な点だ。

「おまけに登場人物を増やすためにわざわざ能力要求してる奴が……

何考えてんだこいつら」

確かにこれ以上にはいかに影響を受けまくっており、しかも他者に能力付与した

者の全員が、原作主人公無双を見たいというある意味全部投げてる要求なのだ。

何故だか、原作破壊を目指してハーレムを目指そうとする奴よりもタチが悪い。

「まあ、いいか。とりあえず仕事仕事」

要求通りに、本来居ないはずの人間を転生させ、願った人物を存在させ、

世界観的にはギリギリありえるがありえない能力を与えて作業を終えた。

こういう単純作業を繰り返していると他の世界からの転生者の存在は割と

ありがたいものである……何故ならば、転生者の存在が無ければ完全に

マニュアル通りに進めていくだけであり、単純作業にしかないのだ。

——とはいえ、送り込んでいる奴らは担当人数を減らしたいが為に行なっているだけなので、男は感謝などしない。

「えーっと、この人物をつくりあげて……この人物に英霊の付与

見事に被ってないな……ちょうど7だから勝手にクラス設定しておくか。

で、一応コイツの対策の為にこの英霊との絆補正を増やして、この人物が

付与対象に興味を抱くように設定して、と」

そこまで打ち込み、後は転生者のデータを纏めて要望通りに改竄するだけである。

——全員容姿が似たようなものであり、名前もちょっと疑問に思うしか無いのが多々あるが、今回だけではなかったのではや慣れている。

《主人公の兄とか妹とかになるやつが60人も居る——！！！！？一般人に

こんな数産めるわけないだろ！！？糞！年代指定してないからなんとかバラバラに分散して——原作時期に0歳もいるけど知らん！

原作に赤ん坊でなんとか関われこのやろー！！》

《《《なにそれこわい》》》

「それ以前に養えないだろそれ」

5000人転生のところはなかなか大変そうだった。

並行分散しても足りないと言いがたい。

割り振るまでは何を要求しているのかわからないのでああいう状況になりやすい。

文句は大元のシステムを作り上げた存在に言うしかないので誰も上司に直談判を

行なったりしていない……上司も確認と割り振りをしっかりと行なっているし、

男たちよりもむしろ多く働いているのだ。

文句など言えるはずもない、というか言ってはダメである。

「さて、設定完了……洗脳関係を要求した奴が居なくて何よりだ」

居たう居たで面倒事しか引き起こさず、酷い結末にしか及ばなかったのだ。

好意を増幅させ、やりすぎて世界中の全員がその人物に対して病むほど心酔し、

死亡したと同時に自害したのだ……一斉に。

「ま、どのように動くかは楽しみだねー、他の世界から

「バカとテストと召喚獣」と呼ばれている世界は」

デフォルトの時間軸も同時に起動させて、違いを楽しみ始めた。

——物語は始まりを告げる、この地点では登場人物が一人も存在せずに。

《なでポってなんだよ!!!? なでポじゃないとか訳が分からないよ!!!?》

《説明……なでた人物を熱血系に変化……燃やすんじゃないんかい!!!?》

「後でVTR見せて!!!?」

——バカとテストと召喚獣の世界観で構成された物語が始まる

プロローグ（後書き）

当然のように不定期更新でございます。

——あれ？主人公出てきてない！？……いえいえ、プロローグです。次からは我らが主人公が出てきます。

——ちなみにハーレムにはならず、完全にオリキャラの単独ヒロインとなります。

明久に好意を抱いているものはいますが失恋は決定済みです——（ぶっちゃけた！？）。

では、また次回！

第一話：明久 ●クラス！？（前書き）

主要人物が出ていないプロローグだけというのもアレなので

追加で投下！

第一話：明久、●クラス！？

『みんな、ぼくのいうことをしんじてくれないんだ』

ひとりの少年が何もない空間に向かって……誰かに話しかけているかのように

泣きながら喚く……親も友人も全ての者が少年の言っている事を否定しているのだ。

もっとも、虐めというわけではなく、ただの戯言としてしか認識されていないだけ。

それを虐めというのであれば虐めなのだろうが………まだ実体化が不安定な

この時では、英霊の存在は認知されないのである。

少年以外には見えないのだから。

『仕方があるまい、我等は坊主にしか見えぬからのう』

『人というのは見えぬものは信じぬものであるから仕方がない事だろう』

外には聞こえない声……少年にのみ聞こえる声が少年の耳に入り込む。

人のない事を確認し、頭のおかしい人物であると認識されないために最大限の

注意を払っている気配がするのだ。

もっとも、人の言葉を介している片方に対してもう片方は静かに知性のある音程で話している。

『にほんごでしゃべってよ、へらくれす』

『いや、喋ってるから』

明久と呼ばれた少年——吉井明久である——がへらくれすと呼ばれた者に

対して話しかけていた。

圧倒的なまでの図体であり、幼い明久など軽く踏みつぶせそうである。

当然、この姿も明久以外にはまったく認識されていない。

ヘラクレス意外にも女性とも男性ともとれる声の高さの者が明久に
対して、

ツツコミを入れていた……とはいえヘラクレスが明久に対してわからない単語を

使ったことにも若干非がある。

——ヘラクレスとはギリシャ神話の最大の英雄であり、ここに存在
しているのは

紛れも無く大英雄本人である。

『えるきどう……きんぴかのおうさまは？』

『誰が金ぴかだ馬鹿、一応王として認識しているのは褒めてやる
が』

『まあまあ、落ち着けギルガメッシュ』

また異なる名前が出てきた。

淡い緑色の長髪を持つ男性にも女性にも取れる人形のような男性と
黄金の印象しか

感じ取れない黄金の髪に真紅の瞳を持つ男性。

人形のような男性はエルキドゥ、黄金の王はギルガメッシュ、人類最古の英雄王の
唯一無二の友人とかつてひとつだった世界を手中に収めていた最強の英雄王である。

『明久、家に帰ってイスカンダルと一緒にゲームでもしたらいいと思うよ。』

今日は親御さんもお姉さんも帰ってこないんだから』

『よし、このあいだのりべんじだいすかんだる！』

『気が変わるのが早すぎだのう』

『それが、アキヒサ馬鹿の良きところであらう』

最後の男は征服王と名高いイスカンダル……ヘラクレスには劣るが大柄な男であり、赤い髪と赤い髭が特徴的な美丈夫である。

本来なら出逢う筈のない存在と邂逅を果たし、友好を深めている明久は認識されて

いれば、確実に世間から大注目を浴びるのだろうが、残念ながら、明久自身の

評価のせいで信用がされていないのだ。

それでも、その嘘と断言されていることを抜けば学校では中心となつて人気を

誇っていた、男子女子問わず恋愛感情には満たない好意を抱かれるほどに。

『って、あれ？』

『どうしました？明久（また、あの子かな？）』

ふと、明久が視線を感じたのでそちらの方向へと視線を向けたのだが、そこには誰も居なかった。

否、居た事にかわりがなく、今でもいるのだが、明久の視線から逃れるように

隠れてしまっているだけだった。

もつとも、気配を察知できるエルキドゥにはあまり意味をもたらさないのだが。

しかし、あまり気にすることなくイスカandalとのゲーム対決をいそいで行いたい

明久は気にすることなくさっさと走り去っていった。

『そういえば、今日の晩御飯は玉藻が作るみたいですよ』

『何！？急がば奴は稲荷寿司しかつくらぬではないか！！？』

エルキドゥの独白を聞いて、ギルガメッシュが急いで気配を遠ざかせる。

苦笑しながらもエルキドゥは親友のあとをついて行った。

ヘラクレスだけが視線を固定し続けていると、そこには銀色の髪をウェーブ状で

伸ばした少女がいた……明久に対して眩しく羨望を感じる視線を送りながら。

＊

数年近く時間は流れ、少年はまだ少年ではあるが幼さがなくなり、英雄達も存在が

明らかにはなっていないものの、明久と共に居続けている。

両親と姉はアメリカに行き、英霊達は実体化が限定的な場所で可能となり、

家の収入が異常なほどに増えた。

英霊達は数のほとんど留守番を任されているのが多いのだが、それでも

4人ほどが霊体化しつつも明久にくつついて行動を共にしている。

「おはようございます西村先生」

「おはよう吉井——待て貴様らまだ時間に余裕はある」

明久が到着し、校門の前に立っている体格のよい教員——西村教諭に挨拶し、

挨拶を返されると、周囲にいた生徒が一斉に時間の確認をしつつ駆け始めていた。

——明久の学園での評価は馬鹿、完全に馬鹿である。

それは、本人である明久も承知しているのだが——授業態度や登校などでは

ごく普通に遅刻もなく騒ぎもしない（自習は別だが、これは全員に言える）。

その事を真に把握しているのは、明久の目の前に居る西村教諭だけ

だろう。

事あるごとに殴っているのだが、その原因は100%明久に問題があるのだ、

別に虐めというわけではない、程度によっては暴力もない。

「まったく」

「多分、みんなりの冗談だと思いますよ？」

明久が苦笑しながら周りを見渡すと誰一人として視線を合わせなかった。

冗談ではなく、本当に遅刻の常習犯だと認識されていたらしい。

その事を理解した明久は、苦笑から乾いた笑いに変えて若干落ち込んだ。

確かに去年は完全な品行方正とは言い難い態度だったのだが、それは一緒に

つるんでいた人間も同様に言える——何故明久だけこういう理不尽な評価を

受けるのかは不明なのだが、おそらく馬鹿ということで済まされているのだろうと

予測しつつ明久は幸せが逃げると理解しながらため息をついていた。

「まあ、お前の努力は知っているし。その内評価されるだろ」

「ありがとうイスカンダル先生」

「誰だ!？」

『声が似とるだけだろう、坊主』

トライアスロンで優秀な成績を修めており、鉄人という呼び名であれば知っている

西村教諭だが、明久の口から出てきた人物に心当たり（名前だけなら知っているが）

がなく、ツツコミを入れていた。

そのツツコミにあわせるかのようにイスカンダルが明久にツツコミを入れる。

「すいません、知り合いとそっくりな声だったので」

「まあ、混乱してたのだろうから仕方がないが——ほら、クラス詳細表だ」

そう言って、西村教諭は明久にクラス分けの紙が入った封書を渡す。明久にだけ感じ取れる気配がのぞき込もうとしているのを察知していた。

明久の思惑通りに進めているのかどうかの確認のためである。

（代表になれる筈、なんども確認して予測があってれば）

『まあ、張り出されている成績をもとにこのぐらいであれば代表だと

確信が取れそうな点数にしばったもんね』

そして、明久が封書を破って取り出した紙に書かれていた文字を確認し——

吉井明久——Eクラス

思わず西村教諭の顔を見ていた。

「なん……だと……」

「去年まで馬鹿なのではないかと思っていたが、認識を改めんな。」

とはいえ、本来ならFクラスなんだがテスト中に途中退出した者が居てな。

その影響で繰り上がりになったんだ」

『そういえばどこかの教室で倒れる音が聞こえたよね』

明久と違う教室で試験を受けていた生徒が途中退出で0点扱いとなったようだ。

体調管理も試験のうちという鬼のような校則のせいで明久のおおになる野望が

軽く打ち砕かれた。

とはいえ、その生徒自身を責める気にはなれない……そういう事も含めて点数を

調整しなかった自分が悪いからである。

「Fクラス代表となってAクラスを征服するという野望が開始前にエンドロール。」

残り一年分は何を放映したらいいんですか！！？」

「知らん」

『試験召喚戦争が醍醐味なのだがのう』

試験召喚戦争はあくまでも、モチベーションを上げるための手段のひとつに

過ぎない——試験召喚戦争とは、戦争の名がつくとおりの戦争であり、

実際に人間同士で殺し合いを行うわけではないが、科学とオカルトの奇妙な

融合によって偶然出来た召喚獣という自分自身の分身のようなものを用いて

戦い合わせる戦争である。

ちなみに試験という単語がついている理由が、召喚獣自体がテストの点数によって

能力が固定される為であり、能力によって勝敗がわかるひとつの要素であるため、

勉強ではなく、試験という単語で通称としているのである。

「Eも下位クラスだから試験戦争に意気込みを持っているに違いない!!」

「というか想定外だけど気にしない!代表じゃなくてもやりようはある!!」

「やる気は結構だが、クラスの面子で判断しておけよ」

*

「ここがAクラスか、学校にしては豪華すぎる」

『去年のクラスに比べればましな程度だな』

ギルガメッシュの意見はとりあえずスルーしつつ明久は最高クラスである

Aクラスの室内の概要を確認していた。

机に該当する部分はシステムデスクであり、ノートパソコン・個人用の冷蔵庫、

場所ごとに気温を変化させることの可能な個人用の冷暖房器、システムデスクの

上にはお菓子がいくつか並べられており、いずれも高そうなものばかりだった。

おまけに広さは1学年で授業を行っていた教室の5倍もの広さである。

さらには恐ろしいことにAクラス専用の購買が後ろの方に陣取っていたのである。

休憩および泊り込み用の専用部屋や来客用の部屋まで存在していた。

『ええい、早急に試験召喚戦争を行わんのか。早く制圧したいのう』

征服が癖とはさすがは征服王というべきなのだろうか。

Aクラスに入っていた生徒の殆どが妙な寒気を覚えたらしききりに周囲を

見渡していたのは気のせいではないだろう。

ふと、明久が視線を感じたので視線のさきを見てみると日本人形のような容姿の

少女がジッと明久を見つめていた。

少女は明久の親友である霧島翔子……とある事情から仲良くなつて、霧島の恋の

応援を明久がしている状態である。

今、視線を送ってきている理由は明久が眺めすぎている事に対して、ちよつと

気になっただけだろう——その証拠に、すぐに視線を手元の参考書に持っていて

予習を始めていたからである。

「やっぱり霧島さんはAクラス……か」

悪意のない感情の視線だったためか、明久は先の視線でちよつぱり幸せな気分

になって浮かれていた……恋愛感情は無くてもあれだけの美少女に見られたら幸せに

ならないはずがないもちろん表情には出してはいないのだが、こんな光景を

長く付き合っている友人などが見たら確実にバレバレだろう。

少なくとも実体ではない三名の人物がニヤニヤと（一人は親友に便乗してるだけ）

明久を眺めていたからである。

が、ここで急に見下すような視線を感じてそちらへ顔を向けると鋭い視線で

明久を射抜いている一人の男子生徒が居た。

視線はニヤニヤして気持ち悪いと訴えていたのである……訂正、明久は結局デレデレ

していたようだった。

正論すぎて反論できないので明久は視線だけで謝って、その場を後にしていた。

その後、Bクラスの設備を見てみたが、購買・休憩室・接客室が無く、個人用ではないが、公共の大型冷蔵庫が設置しており、個人用の冷暖房装置も付属、机は

システムデスク、椅子はリクライニングなのは一緒のようであり、教室の広さは

去年のクラスの3倍の広さである。

パソコンは共用のものがいくつか設置してあるのが見て取れた。

自動販売機がおりてあるのも特徴的だった……暖かい飲み物はあそこで

購入するのだろうか……ここから飲み物は料金ありだということは理解できた。

「一気に落ちるってわけじゃ無いんだねー」

Cクラスから冷暖房設備あり、共同の中型冷蔵庫有りにまで低下。

自動販売機もあったがBクラスは3台だったのに対して、こちらは2台だけだ。

教室設備は去年のクラスのものとはば代わり映えしないものになっている。

広さ的には去年のクラスの2倍と広さも少し落ちてきている。

『だんだん格差があるのが見て取れるね』

『この分では最低クラスはどこまで酷いのか気になるわい』

Dクラス、冷暖房設備有りで自販機なしの保管用らしき中型冷蔵庫。自動販売機も1台にまで減っていた。

教室の広さはCクラスと同じ広さで広さ的には大差は無いようだ。そして明久の所属するEクラスだが、冷暖房設備はあるもののスト

ーブと

扇風機だけしか見当たらない。

冷蔵庫や自動販売機は存在せず、教室の広さは去年のクラスと変化なし。

『普通の平均的教室ではあるのう』

『Fクラスは木造で昭和時代風の教室なのかな?』

「見に行ってみよう」

まだまだ時間は存在するので、明久は最低クラスであるFクラスの教室へと

足を運び始めていた。

余談だが、明久がEクラスの室内にはいり、席を確認してカバンを置いたことに

クラスメイトが目を見開いていた。

失礼ではあるのだが、明久は怒らず、必死にヘラクレスを抑えていた。

第一話：明久、●クラス！？（後書き）

英霊達は基本的に明久に好意的です。

ではまた次回（〇・・〇）／～

※ヘラクレスに関して訂正……明久のチート具合が上昇しました

第二話：いきなり宣戦布告された？（前書き）

締切で追い詰めたら、何故かこっちの方が早く書き上がったでござる

Eクラス生徒はFクラス生徒と違って部活動優先ですので
F F F団のような組織は作られません………が、少ししたら
健全な意味で妙な集団が出来上がります。

では、本編をどうぞ

第二話…いきなり宣戦布告された？

Fクラス教室の前に来て明久は驚きのあまり足が止まってしまった。

「戦時中にタイムスリップしたようだ、どうしよう」

『現実を見据えなさい明久……噂には聞いてたけどこれはひどいね』

『外観の地点でもはや入る気が失せた……Fクラスにならずに正解だったのではないか？^{アキヒサ}馬鹿』

ギルガメッシュの言うとおり、入らなくてよかった気がするという安心感と

途中退出した生徒に対する同情心が同時に明久を襲っていた。

「でも、きっと中はまともなはずだよ……仮にも学校なんだし」

『そうだね、試験校とはいっても勉強をするための機関なんだしひどい設備ではないはずだね』

外観で判断してはダメだと明久は自分に言い聞かせて、エルキドウの願望も

若干聞き入れて欲しいという願望と共に扉を開け放った。

「おはよう」

「とつとと座れ蛆虫やろう」

『ヘラクレスを止めて!!?』

『それが教師のセリフかあ!!』

『落ち着け!』

『ヘラクレス落ち着かぬか!!?』

強大な守護者がブチギレたことにギルガメッシュ・エルキドウの両名が

止める側にまわり、イスカンダルも止められる側から止める側に回った。

明久は視線だけでそのハラハラ劇を見ており、先程の罵倒はスルーした。

というか、ヘラクレスは沸点が低すぎる……過去の出来事から子供に対して

愛着があるうえに、明久に対して好感度（家族的な意味で）が高いので。

「聞こえてねーのか、ああん？」

「……雄二？」

Fクラスの教室の教卓の場所に居たのは明久の悪友である坂本雄二その人であった。

一応明久は言葉にしないで視線だけでなんとかそれ以上口を開かないで欲しいと

頼み込んでおいたが、どこまで有効なのかはわからない。

「何をしてるのさ雄二」

「いや、せっかくなんで担任の代わりに教卓に上がってみた。
代表にはなれなかったけどな」

罵倒の主が雄二であった事を知ると、若干ヘラクレスも落ち着いてきた。

先生であるならまだしも友人であるなら罵倒とかはあるだろうという判断からくる

寛容さからである。

余談ではあるのだが、ヘラクレスが荒れ狂った時に空気が震えて教室が若干揺れ、
殺気を浴びた者のほとんどが昏倒してしまったのである。

「急に寝た人が多いね、こんな室内で寝れるなんて凄いや」

明久のこんな室内発言は室内環境にある。

木造の机、椅子であるのは予想の範囲内なのだが、何故か床は畳という謎仕様。

おまけにとろどこと穴があいていて空気が若干埃っぽい。

窓はひび割れどころかガラスがなく、すきま風は入り放題という最悪な環境だ。

というか何故か茸が生えているのだが気のせいだろうか……おまけにカビ臭い。

『……………教室を間違えてないか？ただの廃墟であろう』

『そうだな、いくらなんでもこんな場所が教室であるはずがない』

「相変わらず遅刻だけは回避しとるのう。明久、おはようなのじ

や」

「あ、秀吉おはよう」

少女に酷似した姿の明久の男の友人、木下秀吉が話しかけてきて明久も挨拶を

きっちり返している。

ちなみに明久は秀吉をキチンと男としてみている……理由は知り合いに似たような

人物がおり、説教をされ続けていたからである。

知り合いというかエルキドゥの事であるが。

「…………おはよう」

「おはよう康太…………カメラ構えてもないから」

カメラを構えている少年の名前は土屋康太…………ほとんど喋る事が無い少年である。

とある理由から妙な渾名を獲得している。

それはさておき、康太がカメラを構えている最大の理由が…………英雄の撮影である。

以前、需要がかなりある明久を撮影した際に写り込んでいた幽霊のようなものに

疑問を抱き、明久に尋ねたところ、神話の英雄達であることを知らされ、その内の

1人の女性（と勘違いされているエルキドゥの事）をしつかり撮影しようと躍起に

なっている少年である。

なお、本来ならカメラ如きでは撮影不可能なのだが、ギルガメッシュ曰く、何故か

宝具の域にまで到達している撮影技術の影響であるらしい。

そんな馬鹿なと思ったけど、英雄には割と技術宝具の持ち主が多いらしい。

実際、家で留守番している一人が技術宝具を持っていたのが例として上がる。

……ムツツリーニ、一体何者なんだ。

「いつものメンバーみたいじゃの」

「……………えーっと」

秀吉の若干嬉しそうな（友情的な意味で）言葉に明久が言葉に詰まる。

明久の視界の外で教室内にいる唯一の女子生徒がなにやらガッツポーズを

行なっているのだが、それも哀れにしか思えない。

何故ならば――――

「ちょっと、通してもらえませんか？」

「先生が来る時間のようじゃの」

「ん？吉井君はこのクラスでは無いでしょう」

別のクラスであるからだ――――理解した瞬間、教室の時間が静止した。

表情が完全に硬直している。

人間は、信じられないことが起きると思考を放棄する生き物である。

「じゃ、じゃあ……Eクラスに行くから（逃げるのも戦略のうち）

「

この後の惨劇に備えて、明久は逃走した。
というか逃走せざるを得なかった。

＊

「遅れましたー」

「Fクラスの教室を見に行っただけだろうから不問にしておこう。
他にも似たような理由で遅れた方が多いからな」

明久の遅刻に対して男性教師は罰則を与えることはなかった。
というよりも同じような境遇の生徒が複数いたので与えなかったのが
正しいのだが。

「さて、皆が揃ったということでは私の名から紹介しておく。
本日から1年間、君たちの担任をつとめることになった言峰綺ことみねき
礼だ。^{れい}

カウンセリングの担当なのだが、くじ引きで引いてしまったの
でな。

担当教科はないが何か悩みがあるのであれば相談に来るがいい」

『……相談しに行った日には傷を抉りそうな担任だね』

他人の苦悩する様を愉悦としそうな類と見抜いた英霊達はそれでも警戒は、

しなかった……相談に向かわなければ必要以上に接触することは無いと

理解しているためだ。

「では、1年間過ごす上での仲間達の自己紹介でも行なっていた
だろう。」

名前の紹介だけでも許可はしておくが……出席番号1番」

「はい!!」

かなり元気よく立ち上がった男子生徒を見て明久は運動会系の部活
でもやって

いるのだろうか?と推測しつつ、自己紹介を若干スルーしながらも
クラスの構成を

しっかりと目に焼き付けていた。

覗いたときに居た割合的にFクラスに男子が多かったせいなのか、
少し女子生徒の

割合が多い気がする。

……明久の自己紹介の順番は吉井よしという苗字のため最後の方になる
のだ。

『むお、今度はサッカー部……ちと待て、部活動生徒が多くない
か?』

『確かに、今十人ほど終わったところですけど全員体育会系の

部活に所属している人ばかりだ』

『……もしや帰宅部は馬鹿^{アキヒサ}だけではないだろうか？』

『部活にいれこんでいるために点数が低いのか……む？』

英霊達の言うとおりで、実は明久も断片的に聞いては居るのだが……今のところ

全ての生徒が何らかの部活動に所属しているのだ。

それも……体育会系ばかりに、あまりの場違いに明久は若干部活に所属していない

生徒が居ないことを祈り始めていた。

「中林に関しては代表だから自己紹介は最後にするべきだろう、次だ」

「はい！」

返事がいい生徒ばかり、偶に冗談を交えて自己紹介を行う生徒もいるのだが、

基本的に真面目一辺倒で熱い性格の持ち主ばかりである。

——ここだけ見れば、試験召喚戦争も積極的に戦ってくれそうではあるのだが。

「三上^{みかみ} 美子^{よしこ}です、所属している部活はテニス部です」

また運動部の生徒だった。

というか、ま行まで来ているのだが、結局全員が運動部員という恐ろしい状況。

このクラスは体育会系で構成されているだけなのだろうか？

——偶然、テストの成績で所属になっているだけなのだろうが。

「——です、所属部活は格闘書道部です」

《《どんな部活だよ!!?》》

明久の前の生徒がよくわからない部活の名前を言った。

これだけだと文科系なのか体育会系なのかわからないのだが、体格を見る限り

体育会系の部活であるのだろうと予測される。

「あ、吉井明久です……………帰宅部でしかないです」

『余は征服王イスカンダル!!世界征服部に所属しておる!!!
!』

『聞こえてないから大声で言っても意味ないよ。というか物騒な部活だね』

明久の自己紹介の後に妙な自己紹介みたいなものが展開されていたのだが……

教師以外に気がついたものはいないようだった。

——というよりも言峰綺礼教諭は確実に英霊達に気がついていました。

「こほん、クラス代表である中林宏美^{なかばやしひろみ}よ。

全員に共通して言えるかもしれないけど、試召戦争には興味がないわよね」

《《《無し!設備も特に異論はないし部活に打ち込む青春に意義

がある!》》》

「なん……だと………」

明久は体育会系というものを若干嘗めていたようであり、まさか試験召喚戦争に

興味を持たずに「そんなことより部活やろうぜ!」なノリに持ち込む思考だとは

認識できていなかったのである。

戦争に参加したかった明久ではあるのだが、どうやら戦う事が出来ないようだ。

「ふむ、確かにそういう面も学生生活の醍醐味ではあるのだが、一応教師として

言っておこう……せめて一度はこちらから出向いて戦うことを心がけろ」

教師も教師で特に戦うことを考えていないようだ———というか、それによって

悩んでいる明久の苦悩の顔で楽しんでいる節があるのは気のせいだろうか?

『あー………いかなのう、これなら0点でFクラスに所属していた方が

何倍もマシだったのう』

『おや?このクラスに向かってくる気配があるよ?』

＊

「Fクラス代表の白虎^{びやっこ} 討魔^{とうま}だ……諸君らに聞きたい。

吉井、明久が我らよりも上位のクラスにいるようだが……許せるか？」

《《《許せん！女子の比率が多いところに行きやがって！！》》》

（明久とて、努力はしたのだと思うのじゃが）

歓声が上がる中、秀吉と雄二、土屋と姫路だけは若干、他の者とは態度が

違っていた。

雄二はクラス代表になりそこねた事と、目の前にいるクラス代表となった男の事を

見てなにやら考え込んでおり、土屋は姫路のスカートの中を覗こうと必死に

畳に頬を押しつけている。

秀吉は友人である明久と一緒にのクラスになれなかった事に若干落ち込んでいるが、

素直に努力を重ねたであろう事を賞賛していた。

「吉井、許さないわよ。ウチを裏切るなんて」

（島田が目のハイライトが消えて怖いのが！？）

裏切るも何も、来年も一緒のクラスになろうといった約束などは交わしていない。

それに、明久とてFクラスにはいり、全てのクラスを打倒して底辺クラスでも

やりようによっては頂点に登り詰めることが出来るんだという建前かつ

征服しつくすという本音があったのである。

そういう意味では決して裏切りなどおこしていない、ただ単にめぐり合わせが

悪かっただけである。

「ケホ」

「姫路、大丈夫かの？」

「ちょ、ちょっとホコリがキツイだけです」

他のFクラス生徒は意外にもこのクラスに適応しているのだが、体の調子が

不調である姫路には厳しいものがある。

というか厳しい以外のなものでもない。

「さて、代表直々に行ってもいいが、近藤ついてこい。早速宣戦布告だ」

＊

「吉井、このクラスだったのか」

「誰？」

『虫酸がはしる面だな、銀髪め』

『――なるほど、最大の誤算は彼奴か……何故わざとFクラスにおさまる

マネを行なったのか？理解が出来ないが』

ギルガメッシュが代表であろう男子生徒を睨みつけていた。

当然ながら、威圧感は無意識のうちに感じ取れてはいるようだが、確実に声は届いていないだろう。

ヘラクレスも本来であればFクラスではない筈の成績の持ち主がいることに

退出するだろう生徒の計算を覆した張本人だと推測する。

ちなみにFクラスだと理解した理由は、先ほど覗いたときに教室内に居た

Fクラス生徒の姿も見えていたからである。

「ほう、Fクラス代表がわざわざ何の用かね？まだHR中なのだが」

言峰教諭がもつともな事を言っているのだが、まさか教師らしいことを言うとは

思ってもみなかった面々が多少驚いていた。

「……（なんで外道神父がいるんだよ!?）……いや、ただ単に事実確認をと思ってね……後は任せたぞ近藤」

「……了解した……我々Fクラスは本日午後にEクラスに対して宣戦を布告させてもらう!!」

《《………は?》》

「俺だって本当は挑みたくないんだけどさ……俺より劣る“観察処分者”の明久が上の設備に居るなんて我慢ならないんだよ。」

勝ち目もあるしな……じゃ、そういうことで」

返事を待つことなく、Fクラス代表と近藤はFクラスの教室へと向かっていった。

——返事を待つ必要がないのは下位クラスからの宣戦布告が断れるものではない。
なかったためである。

「………上等じゃない、仲間を馬鹿にされて黙ってられるもんですか」

《《そうだそうだ! 吉井は我らがクラスの一員! それに全体的に宣戦布告を

したのだから、叩き伏せても文句は言われない!!》》

「え——？」

『仲間想いのクラスメイトで結構なものだ』

急に戦争に対して意気揚々と一致団結し出したクラスメイトに明久はまたしても

体育会系のノリを嘗めていたことを思い知らされる。

というか、原因となった明久を責めるならまだしもかばい、代わりに激怒する事にもあまり慣れていない。

『ふむ、略奪は出来ぬようだが……戦争か。

慣れるためにはちょうど良かったではないか』

確かになれるには丁度いいかもしれないのだが……勝ったら勝ったで悲惨な事になりそうではある。

Fクラスの設備をあれ以上下げるのは非常に心苦しい。

雄二やあの代表はまだしも友人たちを苦境に立たせるのは明久には本意ではない。

複雑な気持ちのまま、明久はお昼まで淡々と授業を受け続けるだけだった。

第二話：いきなり宣戦布告された？（後書き）

表立っている転生者の中で人間として壊れた思考が数人だけいます。
……ぶっちゃけひとりはこの回の代表者の事ですけど。

残りの表立って出てくる転生者は試験召喚戦争を楽しみにして、
前線に出張っているだけです

ではまた次回（〇・・〇）／～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422ba/>

バカとテストと英霊達

2012年1月12日21時56分発行